2006／冬

季刊 福井県和紙工業協同組合

和紙だより

―越前和紙への提言―

■ 永田哲也
現代美術作家。1985年、東京芸術大学大学院美術研究科構成デザイン修了。道路の轍や実物のブルドーザーなどをかたどり、ものや空間を「記憶」させるアートを発表。近年、「皮膚感覚に近い」和紙という素材にこだわり、新境地を開いている。2005年10月パリで開催されたファッション雑貨の見本市-プルミエールクラスでは招待作家として「KIOKUGAMI-和菓紙三昧」の展示を行い、好評を博した。

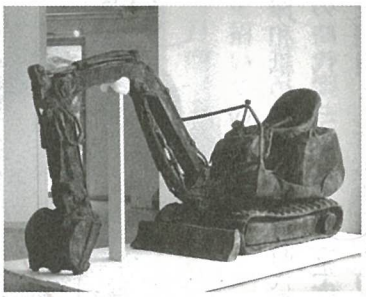
■ 永田哲也さん（現代美術作家）

「アートの心を持って人のやらないことを」

千葉県佐倉市のアトリエでお話を伺う。

● 皮膚感覚が好き

もともと大学では構成デザインを専攻したのですが、工業デザインでもなく広告デザインでもない、両方の領域でやらないことをやってみたいという思いがありました。芸術やデザインに関わる構成要素の研究、たとえば「型」「形」「時間」や「空間」の表現に興味がありました。たとえば、ふくらむ粘土というのを探してきて平らにし、表面に「好き」、裏面に「嫌い」と描いてオーブントースターで焼いて待つ。二次元だった粘土が膨らんで三次元になり、次元と時間の変化、膨らんでいくときの心理的な変化、粘土のパンの両側に膨らんだ空間は何だろう？というようなことを考えさせるコンセプチュアルアートのようなことを発表していたのです。内と外を分け、また繋がりを持つ皮膚。そんな皮膚感覚というものに大変興味があり、最終的に辿り着いたのが和紙だったのです。和紙は、皮膚の湿った感じ、乾燥して粉を吹いた感じは生や死を連想させますし、生きている証の半透明さやしわなども表現できますし、求めていたものに向いていたという事が言えるでしょう。ですから、最初から和紙ありきで入ったわけではないのです。



実物のブルドーザーを和紙で写し取った作品

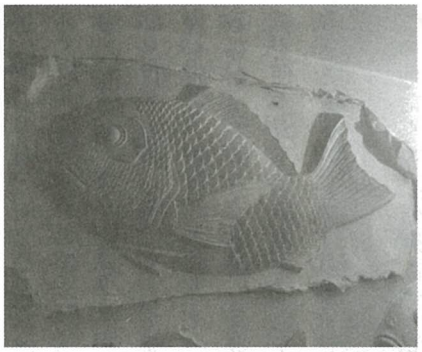
● 和紙との出会い

現代は視覚優位の時代ですが、考えてみたら母方の田舎では柿渋を染み込ませた油紙などを作っていて、昔から日本では生活の中に豊かな皮膚感覚のようなものがあったのではないかと思うようになりました。たまたま妻の実家の山形に行くとき途中のルートに張り子の紙の産地があったのです。福島県の安達町というその地域は、張り子の本体に古紙を使った再生紙を使っていたのですが、空間を写し取ろうという私の作品の利用できると考えました。本体に張り子紙、上紙には那須楮を使った西の内和紙を使おうと考えたのです。実物のブルドーザーや椅子を七層くらいの和紙で写し取って形とその時の時間の「記憶」を留め、百枚くらい貼り合わせて乾いたらそれを切って再び接ぎ合わせる「時間」を表現しました。西の内和紙は、茨城県と国の無形文化財になっていて、那須楮を原料としています。繊維が細くて短く、虫が付かず、絹の輝きと昔から言われてきたそうです。現在ではアート系の和紙としても需要があるようです。これも和紙を探しあぐねた結果ではなくて、たまたま出会った素材ですが・・・。

古い菓子型を写し取った小箱のシリーズ

● 和菓子の木型と「和菓紙三昧」

ある時、ネタを探しに骨董市に行ったとき、鯛の和菓子の型に目がとまりました。木型を見るとそれを掘った職人のノミ跡なんかがあり、時代の息遣いが聞こえてくるようです。これらの菓子型は花、貝、果物、魚、動物があり、伝統的でありな



団扇にも利用された立体的な和紙の鯛

がら、奔放な庶民の粋な暮らしがかいま見えます。懐かしい私達の記憶も含まれていますし、これを和紙で写し取って立体的な団扇や、カード、ポチ袋、菓子小箱などにしてみました。和菓子の老舗「とらや」さんの学術的な機関「とらや文庫」のご協力もいただき、五百くらいの型を写させて頂きました。和紙と和菓子と団扇、又、和菓子屋さんと木型屋さんと団扇屋さんと和紙職人などの違ったものを結びつけてみるとどうなるか、というのが私の発想です。東京、関西、パリと展覧会を開きましたが、意外なものを結びつけて楽しいと評価を頂いています。

●伝統の縛り

日本で出回っている製品というのはシンプルモダンなものが多くきちんとしているのですが、それだけでは面白みがない。和紙も同じで、和紙というと伝統的、歴史があるというようなイメージでしかものが作られないという事があるかもしれません。私が作った和紙と他のもののミスマッチはある種、こういった現象のアンチテーゼであり、野放図、磊落（らいらく）な面があると思います。職人さん、ギャラリストなど、やはり餅は餅屋でそれぞれのプロフェッショナリティを活かせる、ちゃんとしたプロデューサーが必要です。職人さんを巻き込みながら「やりたい、好きだ」というアートの心を持って、各々の力を引き出せる人がいるといいですね。但し中途半端ではいけません。

ショップレポート

■小津和紙博物舗　東京都中央区日本橋本町

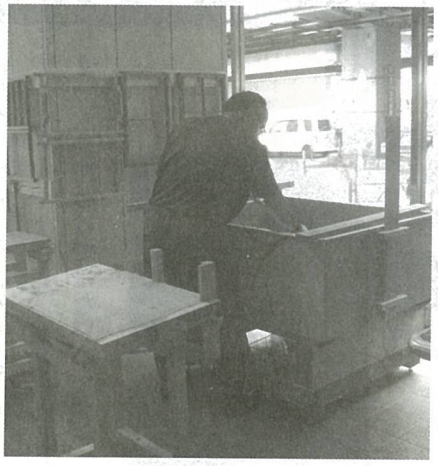
「東京圏の和紙の文化拠点」

マネージャーの小西良明氏

小津和紙の創業は江戸時代第四代将軍家綱の時代、一六五三年（承応二年）、紙の中央問屋として小津清左衛門が大伝馬町に店を構えたことに始まる。店舗は、二〇〇五年一月、起業三五〇年を期に創業の地日本橋本町に戻りリニューアルオープンした。会社は、年商三三〇億円のトイレットペーパー、ティッシュ、不織布、家庭雑貨などを扱う紙の専門商社である。和紙の小売り部門「小津和紙博物舗」（年商二億）は全国の和紙を揃えている他、文化事業にも力を入れているいわば企業メセナなのだと言う。店先には、和紙漉き体験のできる工房が併設され、ガラス越しに通りから眺めることができ、道行く人の興味をそそっている。マネージャーの小西良明さんにお話しを伺った。

●四部門の店舗構成

店舗の構成は、四部門―書道用紙、手漉き和紙、日本画やインテリア用のクラフト・工芸紙、小物となっており、アイテム数は四〇〇〇にのぼる。手漉き和紙では、西の内、小川、小国、美濃、越前、黒谷、吉野、因州、阿波、土佐など全国各地の手漉き和紙を取りそろえ、通信販売にも対応している。東京圏を中心に会員数二万人の「小津和紙友の会」には、展覧会、教室などの情報を随時発信すると共に、ポイント制度での割引も行っている。便せん、封筒などのオリジナル商品の開発にも積極的だ。最近、タイ産の手漉き紙などがホームセンターに出回り、高い日本の手漉き和紙は苦戦を強いられているが、本物を知ってもらうには確かな商品知識と文化性が大切だという。書道用紙のコーナーには、試し書きのできる様々な紙が用意されており、墨のにじみ具合や滑りが確認できるのも嬉しい。



通りに面した手漉き工房

●充実した和紙関連文化事業

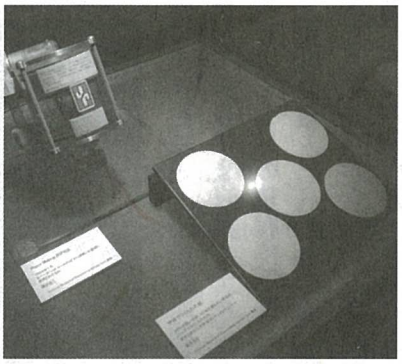
和紙にまつわる文化事業は四つ、和紙の文化センターの様相をなしているのもこの特長だ。「手漉き和紙体験工房」では、原料作りから和紙漉きの行程を千円程度で体験でき、小学生や地元の主婦に人気がある。工房はオフィス街の通りに面しておりショーウィンドー効果も抜群だ。「小津史料館」では、紙と小津の貴重な歴史的資料二千点が随時展示公開され、江戸、明治、大正、昭和の紙の商いの業務記録、商家の生活、使用道具など興味深い展示がなされ、東京都中央区民有形民俗文化財ともなっている。貸ギャラリー「小津ギャラリー」は作品発表の場として活用されているが、伺ったときは個人の手漉き工房の紙展が開かれていた。貸教室「小津文化教室」では書道、押花、ちぎり絵など四十講座の他、テーマ別の一日講習会も設定。和紙好きの人々の交流サロンともなっている。最近の人気講座は、料紙を使った王朝継紙やそれを用いた扇の制作など、特に五十代の女性に人気がある。

この他にも和紙研究団体「和紙文化研究会」の主要メンバーとして積極的に参加。多彩な和紙文化を調査研究し、その継承と広範な学術的展開をめざす研究グループの一役を担っている。月例研究会のほか、随時見学会、紙郷への研修旅行、本の編纂、機関誌『和紙文化研究』の刊行とあわせて、公開講演会やトークショーなどを催している。メンバーには大学の和紙文化研究者、文化財保存技術者、産地の人などが名を連ねる。

初代小津屋は本居宣長の曾祖父に二百両を借りて創業したそうだ。松坂出身のいわゆる伊勢商人の多かった日本橋界隈のお祭り「七福神めぐり」の休憩所としても協力している。

■「紙は今　2005」

日本の紙文化の現在と未来の姿を展望し、技術的な成果物と芸術作品で構成した展覧会が、十月一八日から十一月十三日まで、京都市左京区の京都工芸繊維大学の主催で、同校工芸資料館で開催された。本展は一九九八年の「十九世紀の和紙」展に続いて開催され、和紙を芸術、歴史、科学の視点から眺め、未来の和紙の展望を探ろうというもの。会場には国内外の作家による和紙の造形作品、全国各地の伝統的な和紙、和紙文化や和紙復興運動にまつわる文献、産業界で使用されている最先端の機能紙、など約三百点が並ぶ充実した展示となった。



宇宙空間で漉かれた和紙

会場では一九八三年、スペースシャトルの飛行中に宇宙空間で作られた和紙やポリエステル繊維を用いた5g／m^2の世界一薄い紙、かつて存在しながら途絶えてしまった「まぼろしの紙」苦じん紙（クララ紙）と羅紋紙の復刻紙など多彩な展示物に来場者は目を見張っていた。

実行委員会の和紙造形作家、伊部京子さんは「日本文化を色濃く反映する和紙はWashiとして世界的に認知されていますが、和紙の国際性に加え、新たに模索され始めた科学や産業の紙の視点も加え、紙の可能性を感じ取って頂きたい」と語ってくれた。また、会期中の十一月三日には、和紙造形作家や科学者などのギャラリートークの他、西洋式と日本式の紙づくりの製法を伝えるデモンストレーション、プロダクトデザイナーの喜多俊之氏を招いての記念講演などが行われた。十一月四、五日には、同大学が開設した研究者とデザイナーとの連携による実験工房「紙造形工房」による紙漉や造形作品に挑戦できるワークショップが開催され、外国人参加者も六ヶ国にのぼり、両日で約百名の参加があった。参加者は、滅多に見られない外国人講師が教える西洋式紙造形技法や日本の流し漉きの技法に触れ、紙文化の奥深さに触れることのできた催しであった。

各国からの和紙造形作品

■素の紙展　東京展

エントランス展示

福井県今立の魅力を伝えるイベント「東京いまだて物語」が、一〇月十二日～十六日、東京都港区エコプラザで開催され、この会場の一角で、越前和紙の新たな魅力を発見していただく「素の紙展―東京展」を同時展示いたしました。「東京いまだて物語」会場には、越前和紙を用いて話題になった桂由美さんのパリコレクションの作品展示や、越前特産手打ちおろしそば、墨流し体験コーナーなど様々な企画を行いました。

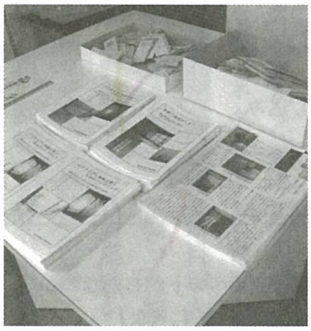
30余りの越前和紙が並ぶ

この「素の紙展」はモダンなインテリアに使える和紙をプロの方々に提案しようというもので、前回の今立での展示に新作を加えた三〇点余りの越前和紙を展示しました。

中でも、ホログラムの細長いシートを紙の中に複雑に漉き込んだ株券のベース紙や、和のインテリアに欠かせない水墨画用紙、柔らかな繊維を編み込んだ長いロール状の大孔雀紙、壁一面に広がる巨大な越前大奉紙など、越前和紙の技術とデザイン性の高さをアピールしたものとなりました。

ロール状に長く漉いた大孔雀紙

また、会場では、和紙を現代の住宅へ壁紙として使用する際の、施工方法を解説したリーフレットを配布しご好評を頂き、紙に関する問い合わせも頂きました。訪れた人は「珍しい漉き方の和紙が沢山あって興味深かったです。」と、多様な技術に感心をされていました。



和紙の利用を解説したリーフレット

■全和連活路開拓全国研修会

全体会議の模様

全国手すき和紙連合会の活路開拓全国研修会が、からすま京都ホテルにて一〇月十六日、十七日の日程で開催された。手漉き和紙の職人七八名と流通、商品開発に携わる人たちが全国から参加し、全体会議、三つの分科会、講演会も行われ密度の濃い研修会となった。

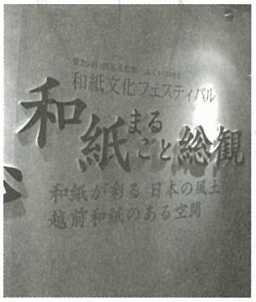
分科会では、「大都市での展示会に関して」「和紙業界の現状打破」「和紙イメージの向上」をテーマに討議され、続く全体会議では、各地の産地の報告、及び分科会での討議内容を元に、活発な議論が交わされた。

全体会議では、下降線をたどっている和紙産業に対して、各地の和紙産地が様々な問題に結集しようという意見が多く寄せられ、エンドユーザーへの情報提供、ラベルによる品質表示やブランドの確立など、実効性のある内容が提案された。

この催しには問屋や販売店からの参加もあり、産地と流通が抱える問題についても白熱した議論が行われ、有意義な研修会となった。

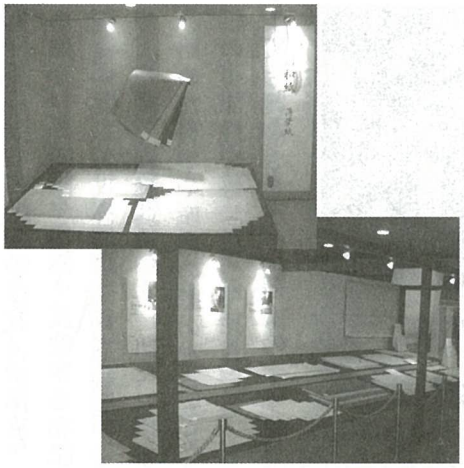
■第二〇回 国民文化祭 和紙文化フェスティバル

第二〇回国民文化祭ふくい二〇〇五が福井県全域で開催され、和紙関連のイベントとして「和紙文化フェスティバル」がいまだて芸術館、今立ふれあいプラザ、卯立の工芸館等で一〇月二二日～三〇日の会期で開催された。



会期中のべ2万人の人が訪れた

特にふれあいプラザでは「日本の心　和紙まるごと総観」と題して、全国津々浦々の和紙千点あまりを集めて展示が行われ、県内外から多数の来場者があり好評を得た。折形や折紙の展示や講習会も行われ、紙の使い方に対する提案も行われた。


全国の和紙展示コーナー

情報欄

● イベント情報

■ 冬を楽しむ手仕事展
時：12月22日（木）～1月10日（火）
場所：東京池袋　全国伝統的工芸品センター

■ 年賀式
時：1月5日（木）　場所：越前市　卯立の工芸館

■ 漉き始め
時：1月5日（木）　場所：越前市　卯立の工芸館

■ インテリア雑貨マーケット
時：1月11日（水）～1月16日（月）
場所：名古屋　JR高島屋

■ 越前・若狭の物産と観光展
時：1月26日（木）～31日（火）
場所：東京新宿　京王百貨店
展示・即売・墨流し実演、体験

■ 伝統工芸品　WAZA2006
時：2月16日（木）～21日（火）
場所：東京池袋　東武百貨店
展示・即売

■ 福井県の物産と観光展
時：3月8日（水）～3月14日（火）
場所：大阪　高島屋大阪店
展示・即売

■ サロン・ド・ムーブル・パリ
以前「和紙だより」にて紹介しました杉原商店さんが、パリの展示会に出展します。今回は、和紙を張った家具や行灯を出展し、また和紙の説明ビデオや施工例を紹介します。
時：1月5日(木)～9日(月)
場所：ポルト・ド・ベルサイユ　メトロポール会場内
「ニッポンデザイン」展示ブース　（フランス：パリ）

■ 越前和紙青年部会　手漉きカレンダー
20年程前から　部員の手漉き技術向上を目的に青年部員が栽培している楮を使い、全員で8月～10月に抄紙、乾燥、印刷（スクリーン加工）を行っているカレンダーができました。
今年は継ぎ料紙として型による流し込みをおこないました。

編集後記
秋は和紙の展示会も多く、組合は大忙しです。展示会では、エンドユーザーと産地をどのように繋げ、どのような情報やイベントが有効なのかを探る良い機会にしたいものです。和紙を展示するだけでなく、もう一歩ユーザーに踏み込む方策が求められていると思います。（よ）

季刊-和紙だより　第9号（2005年冬号）　発行日：2005年12月20日
※無断での転写・転載はお断りいたします。
発行人：福井県和紙工業協同組合　長田昌久　住所：福井県越前市大滝町11-11　TEL：0778-43-0875　FAX：0778-43-1142
編集人：右衛門佐美佐子事務所　右衛門佐美佐子・北條崇　編集所：〒606-8225　京都市左京区田中門前町90　TEL：075-712-8834　FAX：075-702-6223